



会話における聞き返しとあいづちの関係

著者	久保田 真弓
雑誌名	龍谷大学国際センター研究年報
巻	3
ページ	21-28
発行年	1994-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/1977

会話における聞き返しとあいづちの関係

(龍谷大学)

久保田 真弓

1. はじめに

日本人の挨拶に「どちらまで?」と聞くものがある。挨拶と知っていれば、「ちょっとそこまで」と答えられるが、挨拶だと分からなければ、真剣に「……京都へ行って……」などと考えてしまう。何気なくやりとりしている会話にもルールがあり、そのルールがあるからこそ会話というゲームを楽しむことができる。しかしルールにも文化や地域差があり適確に把握していないとあまり楽しむことができない。国際化が進むなかで会話のやりとりのルールや話者交代のシステムの研究が見直されてきている。Sacks, Schegloff and Jeffersonにより代表されるエスノメソドロジの研究では、自然な場での会話を詳細に記述し、繰り返し表われるパターンを抽出して、会話における規則性を見いだそうとしてきた。特に談話を構成しているプロセスや、談話の体系的な特性はなにかという点に焦点をあて、会話のやりとりや話者交代のシステムなどの法則を提示している。

そこで本稿では、話者交替のシステムの一つに取り上げられている隣接ペアの概念を紹介し、聞き手が発する聞き返しとあいづちの関係への応用を検証し、今後の研究方法への提言を述べることにする。

隣接ペアは、挨拶に見られるような言語表現を中心としたやりとりの分析であるが、あいづちは、頭の縦振り(うなずき)など非言語の部分が含まれるため言語と非言語の両面を考慮しなければならない。またあいづちは半ば無意識で打つ場合もあるので特殊なコミュニケーション的行為である。会話の規則性を的確に把握するには話し手側だけではなくあいづちを中心に聞き手側から会話のやりとりを分析することも必要だと思われる。

2. 隣接ペアの特徴

Schegloff and Sacks (1973) が提唱した隣接ペア (adjacency pair) は、挨拶のように社会的慣習によって決められた会話機能で、聞き手は話し手の言ったことを受けて発話するものであるという基本姿勢に基づいており、話し手と聞き手が一組になり、次のような特徴をもった行動をとる場合に認められる。

- (1) 二つのコミュニケーション的行為である。
- (2) 二つの行為はしばしば隣りあって起こる。
- (3) 二つの行為は異なる話し手が起こす行動である。
- (4) 前半部分と後半部分という二つの部分からなる行為で順序がある。

(5) 行為は機能ごとに分類され、後半部分は前半部分より引きだされなければならない。

例えば生徒と先生の挨拶をみってみる。

例

生徒A：おはようございます。

先生B：おはよう。

AとBは「挨拶—挨拶」という二つのコミュニケーション的行為で先生と生徒という異なる話し手の行動である。「挨拶—挨拶」という隣接ペアのAを前半部分、Bを後半部分といい、BはAに隣接し、Aより引き出される応答である。話者AとBの交代は「状況の適切性」(conditional relevance)という概念を満たしたところで認められる。例では挨拶Aという要素が存在し、Aは次に存在すると期待されている挨拶Bがあるとき認められるものである。BがあればBはAの条件を満たす要素として存在すると考えられ、BがなければAにつづいて当然あるべく要素が欠如していると意識されるというものである。従って次の例ではAの後にBは期待されておらず、Bが欠如していると考えの方が話者交代の状況として適切である。

例

生徒A：おはようございます。

先生B：何時ですか？

他につぎのような隣接ペアがあるが、隣接ペアは社会的習慣に依存し、必ずしも英語と日本語では合致しないかも知れないので、ここでは例をあげるだけにとどめる。

1) 挨拶—挨拶

A：Hello

B：Hi

2) 呼びかけ—答え

A：Jimmy!

B：Coming mother

3) 文句／不平—否定

A：You left the tap running

B：It wasn't me. (例1から3までメイナード, 1993)

4) 言明—確認

A：青のり？

B：青のり

5) 勧誘—承諾

A：これ、書いてしまおう。

B：うん。

6) 質問—答え

A：私は忙しくて、子供と対話する時間がありませんっておっしゃる方もいらっしゃるかと思うんですが、そういう方に何かアドバイスはありますか？

B：ええ、あの、忙しいというのは本当によく分かるんですが、でも、あの一、手は動い

ていても、口と耳は子供達にむけることができると思うんですね。

(例4から6まで西原鈴子, 1991)

これらはどれも隣接するペアになっており、前半部分がA、後半部分がBである。実際の会話では、これらがいくつか組み合わされて発話される。特に電話による会話の始め方、終わり方は規則性が高いためこれまでかなり研究されてきた。

例 電話の会話の始まり (Nofsinger, 1991)

1. (電話が鳴る。)
2. H : H'lo : ?
3. R : Harriet?
4. H : Yeah?
5. R : Hi!
6. H : Hi

1と2は「召喚と答え」というペアになっており、電話に答えるときには必ずと言ってよいほど、電話を受ける人がベルの音聞き受話器を取って話し始めるという (Shegloff, 1972)。従って1の電話のベルがこのペアの前半部分になる。また電話の場合は、特に顔が見えないので相手を確認する必要がある (Shegloff, 1979)、それが3と4のペアになっている。5と6は相手を確認してから話し始めるときに使う「挨拶と挨拶」のペアである。このように電話での会話には、かなり規則的なルールがあることがわかる。

この規則性は言語表現だけでなく次の例のように、無言であっても状況により判断できペアを作っている。

例 (Nofsinger, 1973)

1. A : Anne
2. B : ((silence))
3. A : Anne
4. B : What

1と2、3と4は「呼びかけと答え」のペアになっており、2の沈黙もペアの後半部分を構成している。ペアの前半部分が起きれば必ず後半部分が規則的に起きるはずであるというのが判断の基準である。

隣接ペアは、組み合わせて使うだけでなく、ひとつの隣接ペアがもうひとつの隣接ペアに内包されて使われることもある。

例 子供と母親が店先で (メーナード, 1993)

- 1 A : これ買ってもいい?
- 2 B : 890円ね。持ってきたお金で足りるの?
- 3 A : うん。
- 4 B : そう、それなら買ってもいいわよ。

質問1 —
質問2 —
答え2 —
答え1 —

質問1の中に質問2と答えが含まれている。ノフシンガー (Nofsinger, 1991) は、隣接ペアと言っても必ずしも隣接しているのではなく、ペアの後半部分の前にいくつかペアが入り前半部分と離れることもあると指摘している。

隣接ペアに共通した特徴は、話者Aの挨拶や呼びかけなどのようなコミュニケーション的行為によって、Aは話者Bのコミュニケーション的反応を制限しているという点である。つまりBの行為は自由に選択されたものではなく、例えば挨拶に答えるか否か、どう答えるかといった中から選択されたものである。従ってBにとっては、コミュニケーション的行為が制限される結果になっている。それはAにとっては、Bの行為が推測しやすいということにもつながる。またAは自分のコミュニケーション的行為に対するなんらかの反応をBに期待しているという状況が隣接ペアの特徴であろう。

3. 聞き返しというコミュニケーション的行為

あいづちの機能のひとつに聞き手が相手の話を追って「聞いている。」「分かった。」という信号を送るというものがある。しかし時には、言葉の意味を取り違えて分からなくなったり、騒音などで聞きのがしたりすることがある。そのようなとき聞き手は相手に「聞き返す」というコミュニケーション的行為を示す。聞き手は自分の間に対しての答えを話し手から得られるものと期待しており (Lakoff, 1972), 聞き返された話し手は必ずといってよいほど返答する (Phillips, 1976)。そのうえ聞き手は、話し手から期待どおりに答えが返ってくると、それを確認したという意味であいづちを打つ傾向がある。ここではこのあいづちを「確認のあいづち」と呼び、実例を通して、「聞き返し」と「確認のあいづち」の関係をみでみる。

会話の資料として16人の日本人が2人ずつ組になり、10分テレビのホームドラマについて話した会話のうち始めの3分の部分を使用することにする。

まずどのようなときに聞き返しが起きるか例の文脈を追ってみる。例1の文頭の数字は、発話の順番を示し、下線は話し手と聞き手の発話が重なった部分を示す。そして //NNNN//の記号は頭の縦振り (以後うなずき) を示す。

3. 1 聞き返しと確認のあいづち

例1

- | | | | |
|--------|-----------------------------|-----------|----------------|
| 1. K : | 高架線の下 | | |
| 2. N : | <u>それはJ2さんの話し?</u> | | (聞き返し) |
| 3. K : | <u>これは僕の話し</u> | 感想 | (答え) |
| 4. N : | | 笑い | 言ったわけじゃないんでしょ? |
| | | (確認のあいづち) | (聞き返し) |
| 5. K : | 言っていない。 | | (答え) |
| 6. N : | //NNNNNNN// | | (確認のあいづち) |
| 7. K : | で、一生懸命 こうなんていうか 仕事に追われてね、…… | | |

例1では、Kがテレビ番組の内容について説明をしていたが、話しにいろいろおひれが付き、誇張されてきた。そこで聞き手Nが事実と区別するため、(2)で問い正した。その答えが(3)で、Nはそれを聞き、(4)で笑い出し、さらに確認のため聞き返した。2回も聞き返

したのは、1回目の聞き返しの際、話し手と重なってしまい聞き取りにくかったのか、または答えが返ってきたときに笑ってしまったので(3)もう一度ははっきり聞いておきたかったからだと思われる。2回目には聞き取りやすい話し手の答えがあり(5)、聞き手は何回かうなずきながらその答えを聞いた。ここでは(4)の笑いと(6)のうなずきが「確認のあいづち」と思われる。あいづちはうなずきだけではなく、笑いや微笑みによっても行なわれるが(Brunner, 1979)、ここでは笑いが「確認のあいづち」として働いている。この例では下線のところが同時に発話されたところなので、実際はかなり早いテンポで行なわれたことがわかる。しかし聞き手は話しの中でわかりにくくなってきた部分を納得がいくまで聞き返し、すばやく確認の作業をしている。このように会話の流れが速いときは、うなずきのみによる「確認のあいづち」が多いようだ。

3. 2 いいよどみと確認のあいづち

例 2

1. N: 多分 妹となんか いろいろと話しているシーン, シーンがあったから
//N//
2. M: だ, だれの妹? (聞き返し)
3. N: お母さんの そのお母さんの方の妹 (答え)
4. M: あー (確認のあいづち)
//NN//
5. N: うん, いっしょにやったのか……

例2では、話し手は聞き返されて(2)その返答をするときに(3)少々言いよどんでいる。そして話し手が答え終わった後、聞き手は「あー」と言いながらうなずいた。このように相手に言いよどみがあるときは、話し手が完全に言い終えるまで、「確認のあいづち」は打たれないのが特徴的である。

3. 3 聞き返しを続けるパターン

例 3

1. S: …あんなの買ってあげていいの みたいなさ, うちの
2. R: 夫婦で (聞き返し)
3. S: また, 話しが あるでしょう。あんなの だいじょうぶなのかとか
4. R: 夫婦が (聞き返し)
5. S: うん おふくろと やっていけるのかとかね,
6. R: うん //NNNNNNN// (確認のあいづち)

例3でも同時発話があるため、聞き手は(2)と(4)で2度聞き返しているが、その答えがあらわれるまで、何もあいづちを打っていない(3)。話しに夢中になっていたSは(4)でやっと質問に気づき(5)で手短かに答えた。その瞬間に、Rは確認のあいづちを打っている

(6)。何度も聞き返す場合、聞き手は、少しづつ質問を変えなんとか答えを得ようとする傾向がある。そして返答が得られたときに初めて「確認のあいづち」を打っている。

3. 4 期待された聞き返しの答え

例 4

1. M:ここに一緒に住んでもらうようにしましょうというふうに
2. N: ようするにおばあちゃんは
どっちの 関係なの? (聞き返し)
3. M:お父さんの方, お父さんのお母さん, あー, お父さんだって, (答え)
4. N://NN// //NN// //N// //N//
(確認のあいづち)
3. M:ご主人のお父さん, (答え)
4. N: //N// あ (確認のあいづち)
5. M:お母さんね, (答え)
6. N: //N// うん (確認のあいづち)
7. M:で, 結局, その次の朝…

Mは返答するとき4回言い間違えをしており(3), 聞き手はそのつど正しい答えだと思いうなずいている。Nはあまりうなずく人ではなく, 3分の日本語の会話で52回音声によるあいづちを打ち, 頭だけを振ってうなずいているのは18回のみである。しかしMが言い直しているときには, 次いで出てくる言葉が解答だろうと期待しているので確認しようと相手が言うたびにうなずいている。話し手が正しい答えを言えるまでの時間が聞き手の予想以上だったので(3), 最後にやっと話し手が正解を言い(5), 聞き手もそれを確認すると(6)聞き手の顔に笑みがこぼれた。

「確認のあいづち」は, 聞き返した問に対する答えの正否を判断して打つのではないので, この例のように, 言い間違えがあってもあいづちを打ってしまう。問に対する返答を期待しているので, 返答を認めた瞬間, 必ずと言ってよいほど「確認のあいづち」が使われている。

3. 5 「聞き返し—答え—確認のあいづち」パターンの頻度

以上様々な聞き返しと確認のあいづちの関係を観察したが, どのくらいの割合で「聞き返し—答え—確認のあいづち」のパターンが認められるのであろうか, 簡単な調査をしてみた。

統計的にはまだ不十分であるが, 13人の日本人の3分間づつの日本語と英語の会話では, 聞き返しは20回ずつ起こり, そのうち「聞き返し—答え」のみのパターンは4回と3回, 「聞き返し—答え—確認のあいづち」のパターンは16回と15回認められた。また16人のアメリカ人の日本語と英語の会話では, 聞き返しは26回と23回起こり, そのうち「聞き返し—答え」のみのパターンは, 4回と10回, 「聞き返し—答え—確認のあいづち」のパターンは, 21回と13回であった(表1参照)

(表1)

日本語の会話	聞き返し—答え	聞き返し—答え—確認のあいづち	他
日本人	4回	16回	0
アメリカ人	4回	21回	1
英語の会話	聞き返し—答え	聞き返し—答え—確認のあいづち	他
日本人	3回	15回	2
アメリカ人	10回	13回	0

従って少ないデータではあるが、「聞き返し—答え」の後に「確認のあいづち」が入る傾向があるといえそうである。今後さらにデータを充実させ、聞き返し—答え—確認のあいづちパターンによる数量分析を加えることにより話者の文化背景や使用言語による影響を調査することも可能であろう。

4 今後の研究への提言

聞き手は、話し手の内容について聞き返し、少しでも正確に理解しようと努める。間に対する答えを期待している聞き手は、話し手が答えるや否や「確認のあいづち」を打つ。話しの流れや早さに応じて「確認のあいづち」はうなずきのみで表れたり「うん」などという短い音声が付いたりする。またときには「笑い」で答えることもある。

「聞き返し—答え—確認のあいづち」パターンは数量的にも「聞き返し—答え」のパターンで終わるものより多く、隣接ペアとは異なり3回の話者交代でひとつのパターンを成している。1回目の聞き返しで答えが得られないと「聞き返し—聞き返し—答え—確認のあいづち」のパターンになる。いずれにしても「確認のあいづち」は聞き返しに対する答えが初めて表れたとき打たれると言う特徴を持っているようだ。

従って「確認のあいづち」は解答が表れるまで使われないという特徴を利用することにより隣接ペア以外の話者交代のルールを浮き彫りにすることができる。つまり「聞き返し」と「答え」の間にいくつかの隣接ペアなどが入って話者交替が起きたとしても、「聞き返し」と「答え」を捜し、さらに「答え」の直後に起きる「確認のあいづち」を押えることにより、「聞き返し—答え」のパターンを容易に把握することができる。

また日米会話の比較研究では、日本人の同時発話が多いこと及び日本人はアメリカ人よりあいづちを用いることが指摘されている (Maynard, 1986, Hinds, 1982)。あいづちの機能の一つとして「聞き返し」の「答え」の後に起こる「確認のあいづち」の役割は、同時発話が多い日本人にとって重要であり、その結果あいづちの頻度が多いとも考えられる。今後は「聞き返し—答え—確認のあいづち」パターンと、同時発話との関係、あいづちの頻度への影響、あいづちの機能別比較などの研究をしていかなければならない。また日本語、英語というように言語表現は異なっても人間行動の普遍性を追及するうえでも「聞き返し—答え—確認のあいづち」パターンの把握は必要であると思われる。

本稿では、聞き返しの後、期待された返答がある場合を検討したが、時には期待された答え

が全く返ってこない場合もある。特に今回の資料のように話者が見たテレビドラマの内容を話すものでは、細かく質問されても話し手にとってもわからないものもある。それがはっきりしていれば、「わからない」と答えられるがあいまいの時もあるため聞き手が聞き返しても答えが返ってこなかったり、話し手の話しに勢いがついている場合は無視されたりする。そのようなとき聞き手は聞き返した後、話し手が返答に困ると、自分で答えを提供し、話し手に確認させる場合もある。今後はこの点も含めてさらに「聞き返し—答え—確認のあいづち」パターンを検討する必要があるだろう。

最後に隣接ペアは主に言語表現を中心に研究されてきたが、会話の規則性を見つけるには、非言語を含むあいづちの機能を適確に利用し、言語、非言語双方の視点を取り入れた会話分析手法の確立が必要だと思われる。

[引用文献]

- Brunner, L.J., 1979, "Smiles can be back channels," Journal of Personality and Social Psychology, 37 (5), 728-734.
- Duncan, S.D., Jr., & Fiske, D.W. 1977, Face-to Face Interaction: Research, Methods, and Theory. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associate.
- Hinds, J., 1982, "Japaneses conversational structures," Lingua, 57, 301-326.
- Maynard, S.K., 1986, "On Back Channel Behavior in Japanese and English Casual Conversation." Linguistics, Vol. 24, p.1079-1108.
- メーナード・泉子, 1993, 「会話の分析」くろしお出版
- Nofsinger, R.E., 1991, Everyday Conversation, Newbury Cark, CA .: Sage.
- Nofsinger, R.E., 1973, The demand ticket: Getting the floor to speak, Unpublished doctoral dissertation, University of Iowa, City.
- 西原鈴子, 1991, 「会話の turn-taking における日常的推論」日本語学10巻
- Philips, S.U., 1976, "Some sources of cultural variability in the regulation of talk," Language in Society, 5, 81-95.
- Sacks, H., Schegloff, E.A., & Jefferson, G. 1974, "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation," Language, 50, 696-735.
- Schegloff, Emanuel, 1972, "Sequencing in conversational openings," In John Gumperz and Dell Hymes (eds.), Directions in sociolinguistics, 346-380. New York: Holt.
- Schegloff, Emanuel, 1979, "Identification and recognition in telephone conversation openings," In George Psathas (ed.), Everyday language, 23-78. New York: Irvington.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H., 1973, "Opening up closings" Semiotica, 7, 289-327.